4 記号空間論の基本視座

橋爪 大三郎

「記号空間論」の基本視座」『ソシオロギス』
No. 2, 1978年, 東京大学大学院ソシオロギス
編集委員会, 1-10頁.

1. 社会の現実性はどこにあるか?

“記号空間論”は、社会に関する新しい仮説的な理論体系として、おもい描かれて
いる。そこで、まず、理論とはそもそもいかなるものであるか、それを考え直すところ
から、出発しよう。

社会を研究するものの「理論的」な課題とは、なにか? それは、言うまでもなく、
ひとつの信頼すべきまっとうな社会理論を構成すること、すなわち、社会事象に
関する適切な言明の体系をつくりあげること、である(ここで、ある言明が「妥当」
であるかどうかは、何らかの経験的な基準によって判定される。また、「体系」をな
すとは、それぞれの(妥当な)言明相互の間の論理的な関係が、十分に明瞭に整理され
ていることを、いみする)。そこで、この目標を達成するためには、茫漠とした現象
のひろがりのなかから、どのような水準で社会事象をつかみだしてくるのか、それを
まずもってはっきりさせなければならない。

社会理論は、社会を、記述の対象とする。しかし、社会の本性をかたちづくるもの
——“社会的なるもの”——は、何だろうか? 現象的にみれば、たしかに、社会は、
人間のあつまるところになりたつ事態であることに、疑問の余地はない。しかし、人
間諸个体と、それらの集合態ないし群聚としての社会と、いずれを、(理論は)より
realな対象とみなすべきだろうか? この点をめぐって、古典的な社会唯名論/実在
論の対立が生じてくる。社会学草創の当初からつきまとうこの対立は、記述すべき対
象をどこにみとめるかについて、社会学者たちの間に、ひとかたならぬ混乱と見解の
分裂とがあったことを、証示するものだ。

論証抜きで語れば、機能理論派、現象学派の立場と主張は、(理論の完成度のちが
い云々を別にして)それぞれに、相当の根拠と、(致命的)欠陥とを、併せもっている、
とみられる。相当の根拠をもつといえるのは、双方が、社会的な現実を現に構成する
ふたつのモメントのうち、少なくとも片方をとりあげているからであり、それが欠陥
に結びつくのは、双方が、それをもう片方のモメントから切りはなし、自分の手にし

たモメントだけに固執しているところに、由来する。それゆえ、双方の主張は、いが
み合いになりこそすれ、決して互いに噛みあうことがない。しかし、こうした表面は
ともかく、その内実において、いわゆるシステム論的発想と、経験へ固着する現象学
的傾向とは、いずれも同根だ、とみるべきなのである。両者は、互いに血を同じくす
る一体の子でありながら、背中合わせであるために、己れの半身の何たるかを知らぬ
シヤム双生児(Siamese twins)にほかならない。それらは、単独では十全な理論的態
度でないから、実のところ密かに他方に依存せざるをえない、ともに、分裂した近代
的知性のなれの果てである。

“記号空間論”は、システム論ないし機能論の抱えもつ根拠、現象学的試みの抱え
もつ根拠、のいずれか一方のみをとりあげて他方を斬り捨てることをせず、また、双
方を単に並列したり折衷したりするというこもしない。その替りに、両者がそれぞ
れ衝きあっているリアリティ(そのおのおのを、さしあたり、唯物論的リアリティ、
現象学的リアリティ、と称しておくことが、許されるかもしれない)を、社会的な現
実の2つの契機とみなした上で、それらを一貫した立場によって記述・説明すること
を試みようとするものである。(おのおののリアリティの内容については、言及を省
略する。)このような“記号空間論”の企図は、一見したところ、その議論をはなはだ
矛盾した立脚点の上に組みたてられたかのような印象を、与えるかもしれない。しかし、
そう考えてしまうなら、話の筋が逆であろう。社会を構成するひとりびとりの人間の
社会的現実、そのような二重のリアリティが交錯するという矛盾においてしか、成
立っていない。社会理論が解かねばならない問題の核心も、まさにそこにある。この
洞察がまずあって、“記号空間論”を導いているのだ。矛盾は、理論の側ではなく、
まず、社会事象存立の根底に潜んでいる。それを、首尾一貫したひとつの理論のなか
にひきだし、解きほぐしていく作業が、果たして可能かどうか、いまのところ保証の
限りではないが、“記号空間論”は、人間だけが言語を行使するという事実に着眼す
ることによって、その作業を推しすすめるというプランをもっている。このような理
論構成上の特徴によって、“記号空間論”は、来るべき〈言語〉派社会学の一翼を担
いうるものだ、と言えよう。

そこで、つぎに、なにゆえ言語が社会理論に鍵概念を与えられられるのか、の
べよう。

2. 言語と事物

問題を稚拙な形でしか提示できないなら、その問題は解きたいジレンマをなすよ
うに思われてしまう。唯名論かさもなければ実在論かという択一も、もちろん、その

ように提示された問題のひとつであったろう。今日、社会理論がまったく如何ともしがたい混沌とした分裂状態におちいつているのも、同断である。それでは、どこをどう考えなおせばよいのか？

社会は人々が集合するところに営まれている。この現象を、個体と全体とに切りわけた上で、そのいずれに現象の現実性が宿っているかを問うところに、先の疑問は成立していた。しかし、そのまえに、そもそも人々が社会という場で相互に交渉することが、どのようにして可能となっているのか、その根拠からまず問うていくことが、重要であると思う。

人々は、どのようにして、互いにかかわりあうことができているのか？

人々が相互に交渉しあう仕方に注目する考え方が、これまでになかったわけではない。P. Blauのような交換理論の発想では、経済学的な市場行動の理論からの並行関係(類推)において、社会行動を扱おうとする。(しかし、この並行関係が有効にはたらく範囲は、きわめて小さいだろう。)また、たとえばR. Jakobsonのような、コード/メッセージ図式の場合には、コードを共有するという前提を基礎にして、伝達の回路がはたらく機制が導かれる。(しかし、この理論枠では、コード(社会性の実質)が存在することが前提され、その存立自体の根拠は不問に付されてしまっている。)総じて、在来のコミュニケーション論のあらかたが、わたしを満足させないのは、社会が、コミュニケーションへと不可避にさしむけられている人間たちの織りなす構成体であることを、そうした議論が、十分に洞察しているわけでも、また、根拠づけているわけでも、なかったからである。(ここで「あらかた」と言ったのは、あえて捜せば、C. Lévi-Straussの構想したコミュニケーションの一般理論の如くに、その例外と言ってよいかもしれないものがみつかるとは。が、彼とても、ただ仄めかしてみ以上はその着想を仕事の中に定着させるだけの精力を割いたことがあるわけではない。)

社会をかたちづくる人々の交流の基礎には、人間がことばを喋る存在(homo loquens)であるという事実が、厳として存する。この事実に着目するところから、社会理論を構成していこうとする作業の系譜を、〈言語〉派社会学と総称する、とさしあたり考えておこう。“記号空間論”は、この系譜をうけて、この事実をつぎのように受容する——もし、言語現象が人間に固有であることに目をとめるなら、人間社会は、決して個と全体との2項図式によって想いえがかけたりしてはならず、そのもつとも単純な場合といえども、個体と個体との間に介在するもう1つの項、言語ならびに事物を含めた、3項図式においてつかまれるのでなければならない、と。これを、いっそう図式的にまとめると、人—人(あるいは、個/全体)ではなく、人—〈言語〉—人(あるいは、個/〈言語〉/全体)という着眼を外さないこと、と言えようか。(〈言

語〉という表記は、まだ厳密なもののように用いてはいないが、ふつうにいう(狭義の)言語ばかりでなく、それと似たような特殊なあり様をするさまざまな事物にも併せて言及する場合に用いる、と了解していただきたい。誤解を覚悟で略記すれば、〈言語〉=言語+事物、ということになる。)

言語、そして事物が、社会の基本的な範疇のひとつであり、社会理論が記述すべき対象を構成する、などという主張を耳にすると、そんなばかげたことがあるわけはない、と目をとがらせたくなるのが、あるいは平均的な反応というものかもしれない——いったいなぜ、石ころや机の類いまでをも、社会学が相手にしなければならないのか？しかし、“記号空間論”は、あえて、そうしなければならない、と主張する。人と人との真正の中間項たる言語、そして事物のあり様を解明する作業は、社会理論の課題を遂行しようとするかぎり、欠くことができない。なぜなら、この中間項のあり様いかんによって、人と人との相互交渉のあり様それ自体もまた、大きく左右されるのであるから。〈言語〉を概念化することは、社会理論の妥当性、簡潔性を保証するために、必要な手続きだと言えるはずだ。また、言語や事物は、外部にあって観察可能な(純粋)形式として現存するものである、という点で、しっかりした方法論的根拠を提供するはずのものでもある。(「言語」をSaussureのいう‘langue’の意に解せば、上の指摘はもちろんあたらないが、その辺の細かな論点にたち入っている暇はない。)

事物を社会理論が考察の対象とすることが、決して珍しいことでも何でもないのは、少し考えてみればわかるだろう。たとえば、人類学では、事物を系統的に考察しなければならないという事情は、明瞭に直観されているのであって、別にM. Maussの指示によらずとも、博物館が民具その他の蒐集に腐心するのは当り前のことである。しかし、社会理論が事物によせる関心は、単なる蒐集癖や博物学趣味から出発しても差支えないにせよ、本来、はるかにその先の方にまで深化してゆくはずのものだ。社会学はといえば、われわれの社会全体を博物館に陳列してしまうわけにはいかないのだが、そのかわりに、明晰な事物観を用意している必要がある。“記号空間論”は、「言語的定在」という概念を樹てることによって、事物の社会的なあり様を捉え、それを人間の行為分析と結びつけよう、という企図をそなえている。その際、わたしは形式的観点にたつので、記号論的な手法を援用することが可能であるが、そのようにして媒介項を分析するならば、先にのべた唯物論的リアリティと現象学的リアリティとをふたつながらに融解させる共通の培地を、わたしの議論のなかに用意できるかもしれない。

*

ところで、このようにのべてくるなら、同じく事物に着眼するという点で相似通っ

ているかに見える Marx の体系について、わたしがどう考えているか、ふれておく方がよいように思われる。“記号空間論”の仕事は、Marx の体系と、どのような関係にあるのか？

Marx の思想は、ある一貫した視角から、経済、政治、宗教、法、哲学、……をはじめとする、人間の活動諸領域を包括的にとり扱う理論的枠組みを与えている点で、稀有のものであろう。その体系は、事物に対する徹底した目配りによって、その議論のあらゆる1コマ1コマが支えられているゆえに、とりわけ「唯物論的」とよびならわされている。事物的世界観に裏打ちされた、この透徹した議論の体系が、“記号空間論”の最も重要な先行理論のひとつであることは、言うまでもない。

しかし、そのあらゆる魅力にも拘わらず、わたしが Marx の体系に限界を看とらなければならぬとすれば、それは、つぎのような諸点であろう。まず、時代的な制約をあげねばならぬ——Marx は、前世紀半ばまでの最新の科学的成果を前提として、仕事をした。しかし、そののち100年余にわたる時の流れと科学の進展は、彼の議論の前提の少なからぬ部分を、妥当させなくしている。いかにすぐれた論述といえども、1世紀の年月は、そのそこをひび割れさせずにはおかない。

だが、そうした皮相な事情は、本当はどうでもよい。Marx の個々の言説が、今日誤謬であると認められるか否かということは、Marx を批判することと、ただちに結びつかない。体系的な社会理論として、Marx の思想の組み立てを問題にしていくことが、大切だ。

わたしが、〈言語〉派社会学の確立を待望し、Marx の体系とは別に“記号空間論”を用意しなければならないと考えている最大の理由は、Marx の体系において、言語事象が理論のなかに十分な仕方できりこまれていないために、自然哲学(人間の本性規定)が適切に構成されていないのではないかと疑っているからである。(もちろん、このような推測を裏付けるためには、一方で〈言語〉派社会学が理論として内実をえ、いま一方で文献の根拠にもとづく Marx 批判がきちんとなされているのでなければならないことは、たしかだが。)事物を考察するにしても、言語のあり様と事物のあり様との密接な連関を解き明かしていくのでなければ、事物的世界の展開がなぜ人間ないし社会の様相にこれほどの決定的な作用を及ぼすのかを、厳密に明らかにすることが、できないのではないだろうか？ たえば、Marx の生/疎外の概念系列は、自然哲学に淵源している。しかし、この概念に、資本制批判のさらに強力な衝撃力を付与するためには、この概念系列を、〈言語〉を手がかりにして、記号論的に再構成してゆく作業が、必須であろう。これは、“記号空間論”の課題のひとつである。

〈言語〉に着眼する者は、〈言語〉の実体がいかなるものかを、問わなければならない。それゆえ、“記号空間論”は、身体性に関連する諸領域に、論理的な検討を

加えてみることをする。

*

予想的にのべるなら、身体は、人間の根源的な社会性の原基をなしている。言語と事物とが人々の交渉のあり様に関わりをもつことの究極の根拠は何かといえ、それは、人間が身体をもって生存する自然的な存在者であるという事実、求められるほかは、ない。言語も、事物(正確には「言語的定在」、以下同様)も、ともに、人間の身体活動に固有の形式性——身体における分節/統合構造——をその実体として、存立しているものなのである。

大事な論点なので、もう少し詳しくのべよう。ここで注目しておきたいのは、言語・事物・身体に汎通するような形式性である。(従来、「文化」という術語が喚起してきたイメージが、比較的ここで言う「形式性」に近いかもしれない。)形式は、実質と相対的に独立である限りにおいて、これら相互の間で、いわば転移しうる。一般に、身体が活動が、言語・事物を指定するものであることは、たしかだ。しかしまた、個々の身体にそなわっている形式性とはいって、ぎゃくに、言語・事物を介して構成されてくる、と考えるほかはない。かくして、われわれは、言語・事物・身体のあいだを周回する自存的な形式性の円環の如きものに、衝きあたる。この、これ以上溯りようのない社会の根源的な様相を、何とか概念化してみようと思えば、おそらく、つぎのように言う以外にあるまい——人間は、動物種の一つとしての自然的な身体においてありながら、あるなにかの固有な能力(これを、記号能力と総称する)に基礎づけられて、自らの身体的活動を分節/統合することができ、固有な形式性を実現していくことができるのであるが、実際には、この形式性は、社会的に規範として生じてくるほかはない、と。(ここでいう「規範」には、評価的な含意は、まったく含まれていない。)

身体に、そしてとりわけその形式性に、着目するとき、われわれは、社会性の本態としての、もっとも一般的なる規範の概念に到達した。この規範は、身体(の活動)にほとんど染みついており、そのことによって、事物の、また言語の、形式性をかたちづくるものである。かくして、行為も、その特殊な場合である発話も、またその所産である個々の事物も、このような規範の現実態である、と言えるのだ。

3. 〈記号空間〉としての社会

ヒトが、規範にもとづいて、自身および自身の環界を整序していくようになったとき、ヒトの群聚は、自然生態系のなかに見出される諸形態の枠をはみだすような諸形式、すなわち、記号的秩序において、自存しはじめている。このとき、ヒトのかたち

づくる集合態は、社会と呼ぶに値するはずだ。このようないみで、社会を、規範に基礎づけられた形式性の支配する空間、すなわち、記号空間と称することができるだろう。わたしの言う“記号空間論”とは、ここまでのべきだったような視座から、社会を系統的に考察しようという理論構想のことである。

“記号空間論”の叙述を組みたてるにあたっては、それをいったん、いくつかの相対的に他から独立した議論に分解してみた上で、それらを論理的に再構成していく、という手順をふむのが、適当と思われる。

まず、議論のはじめには、人間の活動に固有な形式性それ自体を考察する部分をもってするのが、よいだろう。わたしは、こうした形式性(記号的秩序)を根拠づけるものとして、記号能力を仮説している、それゆえ、ここで、たとえば能力のリストのような形で、特定された記号能力の内容を与えて、具体的に能力仮説を提示しなければならない。

実際に、能力を、どのような内容をもつものとして、いかなる手続きによって、仮説するのか? 一般に、能力の内容を特定すればするほど、理論がみちびく帰結は豊かなものになる、と言える。そして、能力の内容を特定するには、社会事象のさまざまな領域がどのように記号的に秩序づけられているのかに関して、十分に詳しい知識が要求される。それを、仮説検証のための外部基準として採用するから、である。現在のところ、この分野の作業は全般にたちおくり、利用できる材量も決して充分ではない。また、記号能力は、言語能力のような単一の能力として設定されているわけではないから、外部基準も、より間接的な形でしか与えることができなくなっており、能力を仮説する手続きが一層複雑になっている。だから、能力仮説をどの程度までくわしく特定できるかについて、はっきりした見通しをのべるのは、いまのところむずかしい。しかし、つぎの諸点は、言っておいていいだろう。第1に、記号能力は、諸々の記号的秩序に実現されている規範ばかりではなく、言及可能性、構成可能性、了解可能性、……といった基本的な心的諸権能をも、同時に根拠づけるように、仮説するのだからなければならない。そして、その分だけ、仮説すべき内容は、すでに絞られている、といえる。第2に、まだ記号論的な分析がすすんでいない社会事象が多くあるだけに、従来気づかれていなかった証拠をみつけてこられる見込みが、大いにある。第3に、“記号空間論”の能力仮説は、従来多くの社会理論が暗黙のうちに前提していながら特定するのを怠ってきた人間理解を、この際明示的に定式化しようとする努力である。それゆえ、能力仮説を十分に特定化できないからといって、現存する他の理論にとやかく言われる理由はない。第4に、能力仮説が直接検証と結びつかなくても(いわゆる「発見の手順」が与えられていなくても)、能力概念をたてることが理論にとって有効であることに、何ら変わりはない。というのは、能力仮説の内容

を試行的にさまざまに前提してみた上で、そこから演繹的にみちびきだされるおのの帰結が、経験的事実と背反するか否か吟味していく、という間接的な手続きをふむならば、妥当な理論体系を(いくつか)用意できるかもしれないから。わたしとしては、このような見込みにもとづいて、記号能力に関し少しでも多くの具体的な仮説を与えたいと思う。

*

能力論につづいては、その現実態、すなわち、すでに現存する規範の諸形態を、論ずる。(これは、叙述の順序であり、実際の作業にあつては、能力論と以下の議論とは、相互参照させつつ、交互にすすめられる。)われわれの3項図式のもとでは、媒介項の種差に応じて、記号空間をいくつかの部分空間に分離して、まず論じる。

(1) 人と人が、何らの媒介項をへず、直接に交渉する場合、人は互いに身体として出会うしかない。このような一方の極としての領域を、(最広義における)〈性〉領域と考えておくことができるだろう。〈性〉領域は、媒介項をもたないことによって、特殊であり、社会の部分空間にとどめられる。しかし、〈性〉領域は、生殖作用の帰結として新たに生ずる人間個体を、媒介項としてもつようになる。このようにして広がる〈性〉領域が〈性〉関係へと分節/統合されるとき、そこに、固有な構造をもった〈性〉空間が、社会的事実として疎外されてくる。そのなかで、〈性〉関係は、家族諸範疇による規定を受けとるだろう。家族—親族は、このような〈性〉関係から構成された複合であり、それ以外のものと考えべきではない。——こうした“記号空間論”の結論は、構造人類学の所説と相容れないものではないが、後者をさらに徹底させ、近親姦禁忌や家族諸範疇の成立を身体性にまでさかのぼって説明しようとするものである。

(2) 人が自然的諸対象に身体をもってはたらきかけ、そこに記号的な秩序を実現する場合には、人は、労働によって事物を定立している。人と人が、事物を媒介項として交渉するときには、人は、すでに定在する事物の側から規定されながら、その行為を実現するであろう。このような場合には、(最広義における)経済事象が生起している、と言ってよい。とりわけ、実現される人々の行為が、事物を媒介項として規定しあうことを通じて、このように相互に均衡したようなときには、行為の集合態は、分業系とよびうるまでになる。分業系のなかでの人間および事物のあり様は、経済諸範疇によって記述される。

事物を介することにより、行為は、他の行為の与件に転化する射程を、いちじるしく拡大してゆくことができる。事物が身体において現に生起する行為を規定する作用の度合に応じて、社会体系のなかで行為が統合/連合される形態は、道具系、さらには資本体へと、その構造を複合化させていく。このような経済事象の様相は、つぎに

のべる言語空間としての社会のあり様といわば重合することにより、さまざまな変形を被って、さらに錯綜した展開をとげていくのである。

(3) 人と人が(狭義の)言語を介して交渉する場合、人は、ふつうにいういみでの言語的な過程にある、とみなすことができる。

言語的な過程それ自体は、具身の発話者が相互にかわしつづける具体的な言語行為からなるにちがいないので、ややもすると、きわめて容易に理解できる現象であるかのように、思われがちである。しかし、言語現象の理解が、実のところそれほどたやすくはないのは、言語の抽象的な性格に因る。いったい、この抽象性は、言語が規範においてあることに、由来する。規範としての言語は、真正に間主観的なあり方をしていいるから、これを、人と人との媒介項として、理論のなかで独自に樹てておく必要があった。

個々の言語行為は、一方で、発話する個体のそのときどきの心的過程に密着し、その全き表出であることができる。このようなとき、ことばは、可視的な身体の相互布置を適切に反映するような、人称構造をもつはずである。しかし、言語行為は、言語という純粹形式のなかに、構成された意味を疎外するにすぎない、とも言える。それゆえ、この抽象的性格にもとづいて、発話は、いま一方で、どこまでも、発話の個別的な状況(発話者の具体的な世界)を超出していくことができる。たとえば、噂や伝承のことを考えてみれば、この事情はよく理解できよう。こうした場合、人々のかたちづくる受話-受話の円環のなかで、言語行為が社会的事実として自存化していく、という事態が生じている。このように集合的に措定され形式化する発話の内容を、言語体ということにする。

個体が、言語体のようなものを、あえて発話と解しようとするれば、個体は、それを、非人称による発話と受けとめるしかないだろう(非人称とは、個体の人称構造のなかで、身体をもたない身体が占める位置である。個体は、その心的権能にもとづき、ある場合には、このような超越的な対象を、どうしても生みださなければならない)。社会体系の客観的なあり方は、その成員であるどの個体の個別的なあり方からも区別されているから、社会の共同利害は、このような言語体になじみやすく、そのなかに吸いよせられてくる。諺や掟のたぐいは、これである。

言語が超越的なものへとむかうこのような機制にもとづいて、言語は、いかなる抽象的な実体を措定してしまうことも、ありうる。ここに、社会が、虚構をうみだし、その上に存続していくことの、根拠があるだろう。このように、社会的にうみだされる言語諸形態は、個体とその発話との単純な関係とは異なっているので、言語空間の名のもとに考察するにふさわしい。文学-神話-宗教-伝承-法といった言語体の系列が、こうした言語空間を構成している。

*

ここまで、媒介項の種差に応じて、記号空間としての社会を、いくつかの部分空間に下位区分するようにして、論じてきた。これら部分空間は、いずれも、規範によって通底されており、相互に密接な関係がある。したがって、つぎの段階の作業としては、これらの部分空間が、どのように複合して、全体としての社会を構成するのかを、検討しなければならない。

各部分空間の複合の仕方は、個々の社会のちがいに依じて、さまざまでありうる。たとえば、単純社会(simple society)とよばれる種類の社会は、〈性〉空間が社会の基調を与えるような社会、あるいは、〈性〉領域が経済領域と重合しているような社会、とみなしうるだろう。また、文字は、言語体が事物の耐久性を獲得することを可能にしたので、(無文字)社会の様相にある根本的な変化を招来するものであったろう。組織、権力、そのほかさまざまな重要な社会事象は、部分空間で、“記号空間論”が見出した論理を適切に組み合わせた上で、はじめて解明されるはずのものである。

さて、そののち“記号空間論”にのこされた最大の課題は、現にわれわれのおかれている社会——資本制社会の存立を解明することである。“記号空間論”の枠組みによれば、資本制社会は、特殊な一記号空間、すなわち、資本制空間として、記述されるはずである。したがって、この資本制空間の特殊性がいったいいかなる諸前提によって構成されているのかを、記号論的な根拠にもとづいて剔出することが、わたしの作業の目標である。この諸前提が(記号論的に)恣意的であることが論証されるならば、資本制社会を揚棄する根拠を、手にしたと言えるであろう。この作業に、“記号空間論”の最終的な死命が賭けられるはずであるが、本稿では、その企図を確認しておくだけにとどめる。

命題群

本稿では、“記号空間論”の基礎的な論点をかいつまんで紹介したので、その原理論に相当する部分の一部を、以下、仮説的な一連の命題の形に、まとめておこう。これらは、もちろん、暫定的なものであり、論証されたわけでもないが、当面の作業仮説として採用するに足るのではないかと考えている。

1. 個体は、記号的秩序のなかで、自らを実現する。
2. 記号的秩序は、規範として現存する。
3. 規範は、無規定な連続性に、一連の分節/統合を措定するような、形式性である。
4. 個体の経験する無規定な連続性とは、自らの身体である。
5. 心的領域は、身体との異和として存在する。

6. 心的領域は、身体を分節／統合することの反作用において、自らを世界へと構成する。
 7. 世界の実質は、分節された身体性である。
 8. 身体が環界に対する受容器／能動器であることにもとづいて、世界もまた2重化をとげる。
 9. 世界が2重化をとげたとき、世界は個体の表出においてある。
 10. 世界を表出する個体の身体活動を、行為という。
 11. 行為を、自然的諸対象における変形作用という、帰結において捉えたとき、それは労働である。
 12. 行為を、自然的身体の自足性という、過程において捉えたとき、それは遊戯である。
 13. 行為を、それが開示する表出の、抽象性において捉えたとき、それは言語行為である。
 14. 行為は、統合構造を有する。
 15. 行為が定立する記号的な対象性を、言語的定在という。
 16. 言語的定在は、物性が形態に及ぼす慣性律に因って、自存する。
 17. 言語的定在は、行為の統合構造を複合化する。
 18. 言語的定在は、行為の連合構造を拡大する。
 19. 言語の形で定立された言語的定在を、言語体という。
 20. 社会体系は、行為の統合／連合構造として、記述される。
 21. 行為の共時的相互決定の観点からみた社会体系を、分業系という。
 22. (固有の)疎外は、行為の統合構造における偏倚として、記述できる。
 23. 行為の連合構造における偏倚を、差別という。
- ……(後略)……

おまけ
 毎日新聞
 1997年(平成9年)6月15日(日曜日)

島森 路子 評

橋爪大三郎の社会学講義 2

橋爪大三郎著(夏目書房・2000年)

『社会学講義』に入る前の、文字通りの「講義にはいる前に」と題した前置きの冒頭で著者は書いている。「日本は、むずかしい場所としかかたと思つ」。

おそい、これは、この時代を生きている多くの人の事だ。時代は、日本は、あまりには大きな曲の角を曲がった。それに伴うさまざまな矛盾や問題も吹き出している。が、そういう事態の前で、私たちは事もなく立ちついている。一つひとつの事態が、まわって具体的で緊急なそのいせ事態の構想を各々が判断を私たちに求めている。にもかかわらず、この判断と選択が一人ひとりにして容易ではない。政治家や官僚や企業家や、あるいは知識人といった国のリーダーたちだけの問題ではない。それと同時に、私たち自身の直接的にぬきだしならぬ問題になってきているところ。この時代の、この日本のやっかいなところである。なぜこんなことになったのか。

二年前に出された『橋爪大三郎の社会学講義』に続くこれは第二弾なのだが、前作同様ここでも橋爪の「講義」は、まわって明解で筋が通っている。

なぜ、日本株式会社はうまくいかなったのか。なぜ、日本人はここまで自負をなくしてしまっただのか。なぜ、日本人は自分の歴史を見失ったのか。過去の台湾、朝鮮統治に対して、私たち日本人はどう考えればいいか。憲法は？日本の安全保障は？危機管理は？大学(教育)は？私たちの生活は？

そうしたさまざまな命題、本質的で同時にチャーリスティックでもある命題に、著者は、まっすぐに向かい合う。問題のもともとのところ、その依つてきたところを立ち寄り、その地

点から、現在の問題をわかりやすく解きあかそうとする。むしろ、ここに至るまで、著者が用意されているわけではない。そこではなく、私たちが答えを見つけるための道筋が、そのための基本的なステップの取り方が、たれでもわかる言葉で提示されている。

社会学者である著者は、第一の講座を「社会科学を学びたいあなたへ」と題して、社会学とは何か、その学問としての歩みから解きあかすのだが、そこには象牙の塔(古いコトバ)にこもりがちを学問を、現実の私たちの生きている社会の中で生かす方法を問うたい、それができてこそ「社会学」だ、という思いがひそんでいるようだ。そのなかで、このように題した時代、転換期にして、学問は学問として自己完結するのではなく、むしろ時代をリードする形でチャーリスティックな動き(股立方)をしてほしい。

だからこれは、まるで学生に与える書といった体裁は取っているが、実は、最も今日的な、これからは未来的な、この日本という国を構想していくための手がかりをともに考えるための論著集である。

「現代の日本人は、精神的に未熟である。そう思えて仕方がない。それは、一人ひとりの人格のなかに、個人としての自己と、国民としての自己とが、独立して存在していないからである。別の言い方をすれば、両者を関係づけるはずの歴史をわれわれが失い、個人と国民を同時に自己のなかに抱えておくことができなくなっているからである。歴史を失うということは、文化を失い、国家を失い、人間の尊厳を失うということなのだ」

いかにすれば、これは、もう一つの日本人論であり、まともな日本人になるための入門書、といったいのちもいれない。

日本という国を構想する道筋を示す

新刊本・いろ・いろ・紹介